令和８年度の重点目標

１　めざす学校像

「安心して安全に生活でき、一人一人が力を発揮できる学校」

重点目標

１ 生徒に寄り添った指導

・自分を大切にする心、人を思いやる心、感謝する心を育成する。

・生徒指導上の問題の早期発見、早期対応に努め、情報を共有して組織的に対応する。

・個に応じたキャリア教育を実践し、自立や進路の実現に向けて必要な力を高める。

２ 「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善

・タブレットの活用などＩＣＴ教育を推進し、自ら課題解決に臨む態度を育てる。

・言語活動を充実させ、コミュニケーション力と対話を通して判断する力を高める。

・考える授業、分かる授業を実践し、基礎学力の向上と定着を図る。

３ 地域社会とつながる教育活動の充実

・地域社会との交流や共同学習を通して、社会経験を積みながら学びを深める。

・専門家や外部講師と連携し、専門的で生活に役立つ知識・技能の向上を図る。

・ＳＮＳや報道機関などを利用し、本校の魅力を継続的に発信する。

令和８年度の学校評価重点目標及び中間評価

各校務において、年度当初に立てた具体的方策の実施段階にある。授業力や専門性の維持・向上に向けた取組や積極的な情報発信等が進められております。今後、１２月に実施予定の保護者アンケートの結果や、２月に行われます学校関係者評価委員会のご意見も踏まえ、教育活動の更なる充実に取り組んでまいります。

部・校務	重点目標	具体的方策	留意事項	中間評価
中学部	・ことばを育み、思考力を深める授業づくり	・単元の中で求められる思考スキルを選択し、授業を進める。 ・ICT 機器を効果的に活用して、生徒が考えを深めたり、伝え合ったりする機会を設定する。	・生徒一人一人の言語力を見取り、語彙の拡充等に向けた指導を進める。 ・選択した思考スキルを生徒が活用できるように、支援の方法を工夫する。	・各教科思考スキルを踏まえて指導・支援を進めた。生徒の実態によってさまざまな課題が見られた。そのため、段階に応じた課題の提示方法を示し、実践するようにした。 ・大学の先生より留意点等について助言をいただいた。助言の内容を職員に周知し、今後の指導・支援に役立てることができるようにした。

高等部	・伝える力・受け取る力を育てる指導	・実生活を想定したコミュニケーション場面を設定し、相手意識をもった表現や受容の力を育成する。 ・手話・音声・筆談・ICT 等を活用し、多様な伝達手段を用いた指導を行う。 ・振り返り活動を取り入れ、生徒自身が課題を自覚し改善できるようにする。	・生徒の聴力・言語発達段階・コミュニケーション手段の個人差に配慮した指導・支援を行う。 ・成功体験を積ませ、発信への抵抗感を軽減する。 ・「正確さ」だけでなく「伝わること」を重視する。	・生徒の「伝える力受け取る力」についての課題や各職員がコミュニケーション能力向上のために取り組んでいることをアンケートで集約した。 ・アンケート結果を参考に、部の職員全員が各自で目標や取組内容を選択し、２学期から実践を始めている。
総務部	・厳粛で清新な気分を味わい、新しい生活の展開への動機付けとなりうる儀式の実施	・儀式にふさわしい会場になるよう環境整備を行う。 ・卒業式は在校生及び職員全員が準備に関わり、学校全体で卒業生を送り出せるよう計画する。	・担任及び生徒指導支援部と連携し、生徒が儀式の意義を理解して臨めるようにする。	・式が円滑に進むよう、1 年間の儀式の役割分担を明確に示し担当者間で共通理解した。 ・在校生及び職員全員が準備に関わる卒業式の実施計画を作成し、総務部会および部会で承認を得た。 ・式前に職員全体に生徒への指導を呼び掛けた。
教務部	・伝える力、聴く力を高める授業づくり、授業改善	・個別の教育支援計画や指導計画、学習指導案作成の際に、発信力や傾聴力の観点での評価例を示す。	・中学部、高等部本科、高等部専攻科の各段階における評価の観点や評価基準を作成する。	・中学部、高等部本科、高等部専攻科の各段階における評価の観点や評価基準を作成し、全教職員に示した。 ・専攻科の授業において評価基準をもとに自己評価・他者評価を実践し始めた。「伝える」「聴く」ことへの意識の向上が見られた。
教育 情報部	・ICT を活用した校務のデジタル化の推進と教職員の業務負担軽減	・日々の業務で負担に感じていることを聞き取り、デジタル化で解決できる課題を洗い出す。 ・身近な ICT ツールの便利な使い方を教職員同士で共有し、新しい発想で業務を改善していく。	・新しい手順は教職員間でしっかり共有する。 ・情報漏洩などがないよう、データの取り扱いやセキュリティの自己点検を行う。	・給食の欠食届のデジタル化に向けた準備を行っている。 ・不審者侵入時に職員室に速やかに報告でき、合わせて全職員に情報共有が可能な仕組みを整えた。訓練での試行を行い現在は運用中である。

生徒指導支援部	・生徒及び教職員の安全に対する意識の向上	・地域の消防局、消防署、警察署と連携し、より実践的な訓練の実施、より安全な校内環境の整備に努める。 ・安全に関連する話題を定期的に発信する。	・貴重品の管理について周知する。 ・講話だけではなく、体験的、実践的な活動を取り入れ、振り返りや考える活動を設定する。	・全校集会で安全に関する啓発指導やマチコミを通して安全に関連する資料を定期的に発信したりしている。 ・防災・防犯訓練を通して、より実践的な対応マニュアルの見直しを行った。 ・交通安全指導、総合防災訓練についても、関係機関と連携して実施する予定である。 ・今年度、校内における貴重品の紛失は起きていない。
進路 指導部	・生徒自身の進路に関する情報収集能力の向上 ・進路指導の手引きの積極的な活用方法の工夫	・手引きや資料を閲覧しやすいように、掲示・伝達方法を工夫する。 ・進路指導において手引きの活用を促すとともに、より活用しやすいように改訂を検討する。	・知見を広げるために、多様な情報に触れる機会を設ける。 ・担任を中心に周知・活用を促進するとともに、活用実態を踏まえて改訂を進める。	・年度当初全体に向けて手引きの案内をしたが、手引きを参考にすれば対応できる内容であっても問い合わせがあった。 ・改めて手引きに書かれている情報を紹介し、利用を促した。
保健 体育部	・けがをした時や体調が悪い時の相手への正確な状況の伝達 ・急に給食の提供が困難になった場合の対応策の確立	・保健室に来室した際に、主訴や症状を正確に伝えられるように、コミュニケーション方法を充実させる。 ・災害時にも対応できそうな代替給食を考え、実際に食べる機会も設定する。	・症状を聞き取る際には、５W1H を正しく伝えられるように記入用紙等を活用する。 ・アレルギーや食形態の対応を考慮しながら進める。	・保健室来室時の記入用紙について、痛みの程度を数字で記すように見直した。 ・給食が提供できない場合に備える「非常食」について検討した。ローリングストックを念頭に置いて検討している。
自立 活動 研修部	・個に応じた指導と協同的な学びを目指した自立活動の授業づくり	・校外の専門家を活用し、発音指導や情報保障の充実を図る。 ・授業で活用できるように、聴覚障害教育に関する情報提供を充実させる。 ・自立活動の手引きを分かりやすい形に改定し、手引きの活用を促す。	・研修会の様子を撮影し、教職員で指導法を共有する。 ・タブレット PC を活用し、聴覚障害に関する情報提供を行う。 ・経験の長い教職員との検討を行いながら、自立活動の指導等における留意事項を手引きの改定に反映する。	・外部専門家を招いて手話学習会や発音指導の研修会を実施した。 ・夏季休業中に授業に活かすことができるよう聴覚障害教育に関する研修会を実施した。 ・経験の長い教職員の意見を取り入れながら、自立活動の手引きの改定を行っている。

いじめ防止に向けた取組

	重点目標	具体的方策	留意事項	中間評価
生徒指導支援部	・いじめの早期発見、早期対応及び組織的な対応	・生活アンケート及び生徒との面談を実施し、生徒の心身の変化を丁寧に把握する。 ・生徒情報の積極的な共有に努める。	・重大事態に発展する前に迅速に対応する。 ・個人情報の取扱いに留意する。	・毎週、生徒の情報交換会を行うことで迅速に共有することができている。また、必要に応じてケース会や生徒支援委員会につないでおり、重大事態に発展することを防ぐことができている。

多忙化解消に向けた取組

	重点目標	具体的方策	留意事項	中間評価
	・校務補助員への業務依頼の推進 ・設定された施錠時刻の遵守	・校務補助員への業務依頼件数が前年度より増加するよう、具体的な業務内容を提示し、運営委員中心に活用向上を促す。 ・施錠時刻３０分前に声かけをし、時間を意識して業務を進める意識の向上を図り、前年度より施錠時刻が遵守されるようにする。	・校務補助員に依頼が可能な業務をしている職員には、管理職、運営委員から積極的に声をかけ、活用を促すよう留意する。 ・安全衛生委員会、運営委員会等で施錠時刻について確認し、意識の定着に留意する。	・教頭から声をかけたことで、校務補助員への業務依頼につながるケースが見られた。業務依頼につなげる方策を検討して、業務依頼につながっていない職員に活用を促していく。 ・安全衛生委員会で施錠時刻を報告した。定時退校日の施錠時刻が守られるような意識の向上を図ることを確認した。